

# 「地域における近現代資料の記録——高知戦争資料保存ネットワークの活動」

楠瀬慶太

## はじめに

戦後七十年以上が経過し、体験者の語りによって地域や家庭の戦争体験を直接聞く機会は極端に少なくなった。戦時中子どもだった体験者が大半となり、詳細な戦場や空襲の記憶を聞くことも難しくなるなど、戦争体験の質も変化している（成田二〇一〇）。若い人たちや学校教育における戦争への意識も変わり、地域が体験した戦争を「語り継ぐ」ことが困難になつている。

こうした中で、戦争体験者が残した手紙や日記、写真、遺品などの同時代史料（戦争資料）が、証言や戦争遺跡とともに、次世代に地域の戦争の記憶を語り継ぐ重要なツールとなつてしまっている。しかし、これらは近年、家の代替わりや建て替えなどで家庭での保管が困難となり、散逸の危機に直面している。また、戦時期の紙資料は洋紙と安価なインクによつて作成されて

いるため、資料劣化が急激に進行しており、判読できなくなり、資料的価値を失つてしまつてゐる事例もある。さらに、高知県内では行政や博物館の戦争資料の受け入れ体制が不十分である

ことや、戦争資料の価値について認識が広がっていないことも、資料散逸につながつて<sup>[注1]</sup>いる。

アジア・太平洋戦争では、多くの兵士を送り出した地域と戦地は深いつながりがあり、空襲などで地域も戦場となつた。体験を直接語れる体験者がいなくなり、加えて間接的にではあるが、戦争の実相を未来に伝える基礎資料まで散逸してしまうこととは、次世代に地域と戦争の関わりを伝える手段を失うことにもつながる。若い人たちが身近な地域から戦争や平和を考えいくために、地域や家庭の戦争資料を残すことが重要である（楠瀬二〇一六a）。本稿では、近現代資料を残すため高知県中部を中心に活動する「高知戦争資料保存ネットワーク」（以下「資料ネット」）の活動成果から、地域と歴史資料の関わりを改めて考えてみたい。

## 一、高知戦争資料保存ネットワークの活動

### （一）設立経緯と活動目的

資料ネットは、県内で戦争体験の聞き取りや資料保存に関する

る団体や教員OB、郷土史家、マスコミ関係者ら約十人が資料の散逸を食い止めるため、二〇一六年五月に結成した民間の任意団体である。近代史を専門とする小幡尚・高知大教授を代表に迎え、研究者と地域住民が協力して歴史学の手法で近現代資料を記録し、後世に残すボランティアの学術活動を根幹に置いている。団体名を「戦争資料保存ネットワーク」としたのは、戦争資料に関心を持つメンバーを中心に活動を始めたことが大きい。また、高知県民が関わるようになつた日清戦争以後の戦争への県民の関心が高く、資料の情報提供など活動への理解が得られやすいと考えたためで、中近世・近現代の歴史資料全般を対象に全国で展開されている資料保存ネットの活動（奥村二〇一四）と同様に、いづれは「高知歴史資料保存ネットワーク」として活動を広げたいと考えている。

活動目的は、高知県内の戦争資料の散逸を防ぎ、未来の世代へ引き継ぐため、博物館や研究者と協力しながら民間レベルで資料の保存支援を進めることがある。また、活動を通して歴史資料や資料保存に関する知識を普及し、行政や博物館に資料保存環境の充実を働きかけていくことも目的とした。

歴史資料を後世に残すための資料調査（記録）やデータの整理作業は、少人数では膨大な手間と時間、予算を要するが、複数人で作業すれば効率的に記録ができる。具体的には、戦争資料を保管する家庭から資料ネットが相談を受け、①資料のデータ化（撮影記録）②資料の内容を記した資料目録の作成③家

庭での保管方法の助言を行うことを基本活動としている。また、メンバーや保管者が本物の歴史資料に触れ、歴史学の資料調査を実践することで、歴史資料や資料保存について知識を深め、資料の記録・保存の担い手「在野のアーキビスト」（大國二〇一三）となる生涯学習活動としての役割も持つてゐる。

一方で、資料ネットは収藏施設を持たないため、歴史資料の寄贈・寄託などは受け付けておらず、記録と保存支援のみを行い保管者に資料を返却しており、資料の現物が後世に残されるかどうかは保管者の意志に任せている。また、学術的に十分な記録が行えているのは紙資料のみで、勲章や軍服、旗などのモノ資料については、大まかな写真撮影を行うだけで、具体的な記録・保存のノウハウを持っていない点も課題である。

### （二）活動モデル

戦争の語り部がいなくなる中、戦争の実相を未来に引き継ぐ基礎的財産としての戦争資料を記録しようと二〇一六年から活動する資料ネットには、多くの資料が持ち込まれてゐる。その中で、「博物館で受け入れができないと言われた」「資料の価値や性格が分からず処理に困つてゐる」「劣化する資料の保管方法が分からぬ」などの相談が寄せられている。また持ち込まれる資料には、移民や産業、行政、教育など地域に関する近現代資料も多く含まれてゐる。

資料ネットではこうした高知県の地域資料が抱える課題を踏

まえ、二〇一八年から対象とする資料を、戦争資料を含む近現代資料に広げ、歴史学の資料整理の知識を持つメンバーを中心とし、住民と協働で資料を後世に残していく活動モデルの構築を進めている。地域資料の記録や継承を、博物館や大学、行政、資料ネット任せにするのではなく、これらの団体の支援を受けながら地域で資料を守っていく仕組みである。住民自らが生涯学習的に資料整理と保存の活動を進めることで、地域資料の価値や重要性を認識し、地域でアクションを起こすことができる。こうした住民の声や活動が、将来的に行政や博物館を動かし、資料保存の人員確保や体制づくりにつながると考えるからである。大規模災害を機に全国各地で設立されている資料保存ネットワークが、大学の研究者や博物館の学芸員を中心としているのに対し、地域住民を中心に活動を展開している点が、「高知戦争資料保存ネットワーク」の大きな特徴である。

安価な洋紙に書かれた近現代の紙資料は、劣化のスピードが和紙に比べて速い。そのため、資料を現在の状態で記録し、後世の人が読める形にするデータ化の作業が欠かせない。そして、歴史資料が利用できる環境を整えるアーカイブ化も重要である。現在、資料ネットでは、毎月一回の定例会という形で、地域資料のデータ化のプロセスを確立しつつある。すなわち、①資料保管者から資料ネットが相談を受け、定例会に資料を借用して持ち込む②次に定例会で資料を撮影記録して、資料目録と写真データ（DVD）を作成。資料はクリーニング作業を行

も期待している。これらは、資料ネットが資料の受け入れができないという課題を克服する方法として取り組んでいるものである。

歴史資料の継承に、大学や博物館の専門家だけでなく住民が関わることで、歴史の情報や知識が地域で受け継がれ、地域活動に活用される。このような歴史資料を「記録する」だけでなく、「地域で活かす」新しいモデルを高知で構築したいと考え活動している。

### (三) 定期活動

資料ネットでは、毎月第二火曜日の午後一～四時に高知市役所鷹匠庁舎二階の市民活動サポートセンター会議室で「定例会」を開催している。<sup>[注3]</sup>毎回五十人が参加し、高知県内の個人から持ち込まれた戦争資料のクリーニング作業や写真撮影、表題付け、目録作成などを行っている（写真1）。撮影は、日本近

代史が専門の小幡尚教授や大学院で日本史を学んだ筆者らが指導し、資料保存について県立高知城歴史博物館の田井東



写真1 定例会の様子

浩平学芸員の助言を受け作業をしている。

### (四) 普及活動

資料ネットでは資料調査だけでなく、取り組みの普及活動も行っている。保存科学や近代史の専門家を講師に招いて近代資料の性質を科学的に理解し、保存やデータ化のノウハウを学ぶ「勉強会」を不定期で開催している。二〇一六年には県立高知城歴史博物館の田井東学芸員、二〇一八年には高知県立図書館の中嶋浩平司書、国文学研究資料館の加藤聖文准教授を招いた。



写真2 整理資料と資料目録

また、定例会に変わって外部での「資料調査会」を行う場合もある。高知市の「平和資料館草の家」や南国市の「高知県立歴史民俗資料館」では、館蔵で未整理の戦争資料の目録作成と写真撮影を行った。

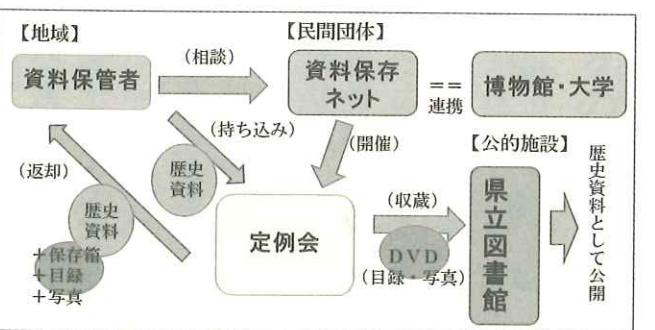
定例会と調査会は二〇一六年五月から二〇一九年一月までで計三十三回開催。約四十五件

三千点の資料を記録している。

活動の様子は、資料ネットのフェイスブックページ<sup>[注4]</sup>で公開している。東京大学文書館の形式をアレンジした簡易版、概要版、詳細版の三形式の資料目録（エクセル形式）もダウンロードできることで、興味のある方は参照願いたい（写真2）。

い、中性紙封筒に入れて返却する③保管者から公開許可を得た資料のデータ（目録と写真）はDVDに焼いて高知県立図書館（オーテピア）に収納し、歴史資料として閲覧できるようにする」という仕組み（図1）の構築を目指している。

保管者には、資料ネットの連絡先を書いた資料目録やデータを資料に添付して返却している。これは家の代替わりや引っ越しの際などに目録を見て、保管者の家族が資料の詳細や歴史的価値を知ることができ、廃棄を思い留まり、今後大切に保管しようと考えてくれるかもしれないからである。また、家族が資料を保管できなくとも、資料ネットが仲介役となり、博物館などへの寄贈寄託が実現する可能性もある。そのため、保管者にはできるだけ定例会に参加し、資料を記録する作業に関わってもらっている。また、中性紙封筒に入れて資料を返却し、保管方法などをアドバイスすることで、資料の寿命が少しでも延びること



資料調査のノウハウを地域で学ぶ「研修会」も開催している。実際に戦争資料を持ち込んで、住民らに目録の作成や写真撮影を体験してもらうワークショップ形式の研修会である。二〇一六年には香美郡の退職婦人教員、二〇一七年にはいの史談会員を対象に、軍事郵便や古写真類の整理作業を体験してもらつた。

また、日本民俗学会年会や高知ミュージアムネット総会、高知市人権教育研究協議会の研修会、八・一五戦争を語り継ぐつどい主催のシンポジウム、高知市の歴史愛好者グループ「路地裏大学」の例会など県内外で開催される会で資料ネットの活動を報告し、活動参加や資料保存の重要性を呼び掛けている。

二〇一八年一月には、保存科学の講演会の内容やその後の文献調査などをもとに、小冊子『高知の戦争資料を残す・伝える—紙資料の保存活用の手引き』(写真3)を一五〇〇部印刷した。<sup>[注5]</sup>紙資料が劣化する科学的プロセスや、日記・手紙・写真・

高知の  
戦争資料を残す・伝える  
—紙資料の活用保存の手引き—



高知戦争資料保存ネットワーク編

写真3 資料ネットの小冊子

絵などの資料の保管方法を西土佐・十和地域の戦争資料を題材に分かりやすく解説している。冊子は、県内の図書館、博物館、資料館に無料配

布し、関心のある方

地域に送った  
「戦地からの手紙」は残つて  
も、地域から  
戦地へ送られ  
た手紙が残る  
ケースは少な  
い。「思出綴」  
は、戦地から



写真4 「思い出綴」

生きて戻った兵士が几帳面に整理して大切に保管していたもので、ハガキ、封書の他、郵便の包みや子どもたちの習字、慰問の手紙など多様な軍事郵便の資料が収納されている。また、一年間で約二五〇通の手紙が地域

から兵士に届いていた実態を示すものであり、当時の軍事郵便制度や家族と兵士の関わりを明らかにしている。他に、軍隊手帳や賞状など関連資料も豊富で、今後詳細な研究が待たれる。山崎氏は元高知県警警備部長でもあった。



写真5 郵便の包紙

(二) 十川万山開拓団資料 (同KK4、写真6・7) 高知市  
「川口部落総会議事録」は、十川村内の川口部落総会の議事録 (田辺・楠瀬二〇一六)。全国の貧しい山村の農業生産と人口の不均衡を解消する人減らしのため、村を分割して土地の少ない住民を満州へ移民させる国策の「満州分村」政策の最末端を知る

高知県では、日清戦争以後の戦争資料の記録公開はほとんど進んでいないが、資料ネットの調査によつて新たな史実や戦争の実態を明らかにする貴重な資料が次々と見つかっている。資料には戦時期のものにとどまらず、近現代全般にわたり、歴史を明らかにする重要な歴史資料が含まれている。ここでは、七件の注目資料について概要や調査経緯、特徴を紹介する。

二、高知県の戦争資料

に持つていつてもらえるようにしている。全文PDFが、資料ネットのフェイスブックページからダウンロードできるのでご活用願いたい。資料ネットでは今後も資料保存を目的とした小冊子を定期的に印刷、配布していく予定である。



写真7 イラスト事録

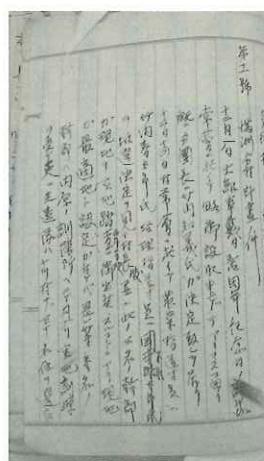


写真6 部落議事録

中戦争に従軍した兵士の資料で、実家の整理をしていた山崎氏の長女から「廃棄を検討している」と高知県立図書館を通じて資料ネットに連絡があり調査を行つた。特に、昭和十五年六月～昭和十六年七月の家族・友人らから中国の山崎氏のもとへ届いた手紙約二五〇通を綴つた「思出綴」は、軍事郵便と地域の関わりを解説する上で的一級資料といえる。アジア太平洋戦争では、多くの兵士が亡くなり激戦地に送られたため、戦地から

ことができる。十川村では、分村は村役場が集落ごとに送出人數を割り当てることで進められたが、戦争末期の厳しい状況から、仮病などで移民を辞退する人が続出した。川口部落会での議論も紛糾し、警察が事態の収拾に乗り出すことになった。最終的には満州へ渡る候補者が決まらず、くじ引きによって満州へ渡る人たちを決めた過程が克明に記されている。

十川村の開拓団は一九四三年からのべ五四七人が満州へ入植。終戦後の混乱で開拓団の六割以上に当たる三六一人（高知県内最多）が犠牲となつた。開拓団員の田辺末隆氏が一九八〇年代に描いたイラスト、油絵などは、この悲惨な満州開拓団の戦後を克明に記録した絵画資料である。開拓団の団長が青酸カリを団員に渡す場面やソ連軍の暴行に備えて女性が髪を坊主にする場面、寒さと飢え、流行病が多数の命を奪つた難民収容所生活、団員が子どもを中国人に売り渡す場面などを描いている。資料の一部は翻刻や印刷されているが、紙の劣化が見られ、画像データで全てを記録しておくべき資料であり、遺族会などの要望を受けて、資料ネットが記録・撮影を行つた。二〇一六年には、田辺氏のイラストをまとめた小冊子『戦争の狂気』と満州関係の箇所を翻刻した『十川万山開拓団史資料集』が再版されており、作家の中脇氏から日本遺産への登録や町文化財の指定も検討するよう求められている資料である。

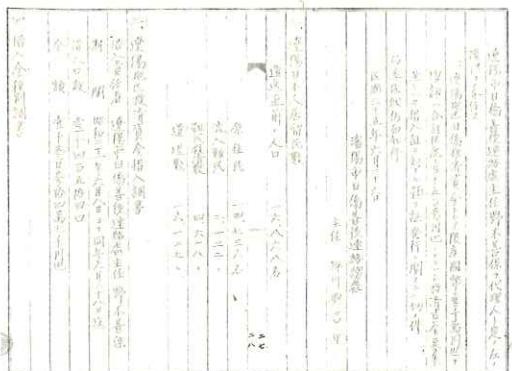


写真9 居留明会の資料

が激しいため、保管者の打診を受けて急ぎ写真撮影、目録作成を行つた。

(五) 野木善保資料（同SH2、写真9）奈良市

元遼陽日本人居留民会の会計報告等を含む資料群。住民救済のために行つた資金集めや組織運営の状況を戦後外務省に説明するため提出した報告書で、資料はその控えとして残つたものか。満州遼陽で戦後、日本人の居留民が帰国に備えてどのように暮らしていたかを知ることができる。ソ連軍の進行状況について詳細に記録し、居留民会は日本人からの寄付や銀行からの借り入れなどで資金を集めている。「民会費」「救済費」「遣送費」「工作費」などの記述は、住民救済や帰国に向けた交渉が組織的に行われていた実態を示している。

聞くと、戦後の満州では、敗戦で行政機構がなくなり、組織的な救済が機能せず、集団での行動が難しくなった印象を受ける

が、資料からは組織的な日本人たちの動きがあつたことが伺える。引き揚げ時の悲惨な体験に注目するだけでなく、このような資料を通して日本人の帰国に向けた動きに目を向ける必要がある。

(六) 依光昇資料（同SN1、写真10）香美市

約八年間従軍し、中国上海近辺で終戦を迎えた香美市出身の兵士（部隊長）の家族宛ての手紙（軍事郵便）などを含む資料群。軍による検閲が行われた軍事郵便で一部、「明日は〇〇〇より惣攻撃」など欠字が見られるものの、戦場の様子が「家は砲弾の為破壊され敵死屍至る所にあり悪臭鼻をつき」「この頃ケロイケロイ敵軍から手紙が来る。あまりやつづけるので相当俺の首をにらんでゐるらしい。五千円の顕彰金がついてゐると下の死を見るのは身を殺される様な気がする」「秋深み行く志那、戦禍の志那の国はどこからどこをみても破壊されてしまった。可哀想な敵国よ」など兵士の心情をつづつたものもある。

一方で、「淑あきは丈夫に

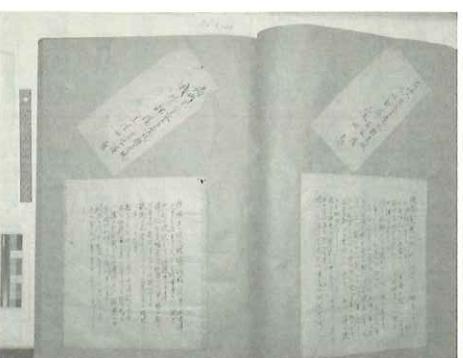


写真10 兵士の手紙

(三) 入文好省資料（同KK6、写真8）南国市

高知市桂浜の坂本龍馬像の建築を主導した実業家・入文好保の家に伝わった明治期のアメリカ行き旅券（移民）等を含む資料群。高知県からは、「テキサスのコメ作り王」と呼ばれた西原清東（土佐市出身）ら多くの移民がアメリカへ入植しており、初期アメリカ移民に関する資料として、移民史の専門家も注目する資料である。

(四) 笹岡長明資料（同KK7）中土佐町

終戦後に高知市の朝倉兵營（陸軍歩兵第四四連隊跡地）で組織された「臨時憲兵隊」の名簿。英語、日本語で、約一年あまり戦後処理にあたつた臨時憲兵隊の実態が垣間見える。高知県を中心に四国出身者が多く含まれており、関係者への聞き取りとともに研究が求められる資料である。臨時憲兵隊に関する資料は貴重だが、紙の破れやペンの薄れなど劣化

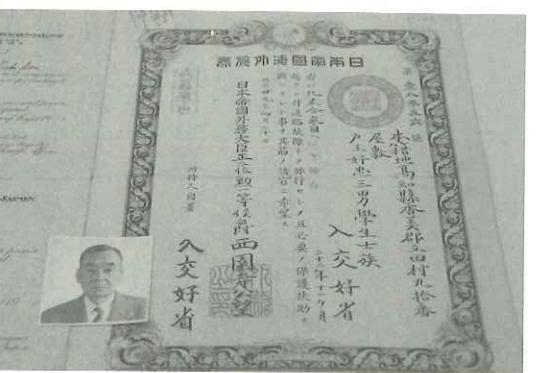


写真8 米国行きの旅券

なつた事だろう」「皆さま達者が」など家族を思いやる気持ちも書かれている。軍事郵便は、戦争とはどのようなものかを地域から出征した兵士の肉声で語っている。また、地域の友人や家族はその身を心配し、兵士自身も家族を思い戦っていたことを教えてくれる。戦争とは何か、戦争になつたらどのようにことが地域に起きたのか、それを自分たちの住む地域に住んでいた兵士の肉声で伝えている。

（七）県投網連盟歴代番附表（同KM1、写真11）安芸市  
戦後、高知市の浦戸湾で行われた娯楽・投網の大会の参加者番附などを含む民俗資料群。関係者の高齢化が進んでいることや資料の一部が一九九八年の水害で水没した経験から「今のうちに記録して残したい」と資料ネットに相談があり、写真撮影と目録作成を支援した。投網には陸網と海網があり、フォームの美しさや捕れた魚の大きさなどか



写真11 投網番付表

これまで見てきたように高知県の地域にはまだ多数の近現代資料が残されている。資料ネットの活動成果は、これらを少しずつ発掘・整理し、中性紙の封筒に入れるなど保存処理をして地域に返却し、資料保存の望みをつなぎることにある。資料は家庭や地域団体に残されたものだが、詳細な歴史を語るものが多く、保管者から歴史資料としての公開許可が得られたものは、資料目録や画像データを今後全て公開していく予定である。資料の活用については今後の課題だが、データベース化の作業（楠瀬二〇一八）や資料公開を通じて資料館での展示や資料を使った研究の進展も期待できる。

近現代資料は、分野や時代が多岐にわたり、数量も多い。そのため、博物館や教育委員会による調査や受け入れのハーダルが高い資料となっている。一方で、難解な古文書と異なり、字が判読できるものが多く、研究者の支援があれば古文書の素養がない者でも、地域や家族の歴史をある程度理解できる点に特徴がある。また、ローカルな地名や人名が登場するため、判読さえできれば研究者より地域住民の方が内容を理解しやすい資料が残されている。資料ネットの活動成果は、これらを少しずつ発掘・整理し、中性紙の封筒に入れるなど保存処理をして地域に返却し、資料保存の望みをつなぎることにある。資料は家庭や地域団体に残されたものだが、詳細な歴史を語るものが多く、保管者から歴史資料としての公開許可が得られたものは、資料目録や画像データを今後全て公開していく予定である。資料の活用については今後の課題だが、データベース化の作業（楠瀬二〇一八）や資料公開を通じて資料館での展示や資料を使った研究の進展も期待できる。

## おわりに

料である。そのため、歴史の伝承や地域活動での利用、地域教育の題材としても活用しやすい素材なのではないかと思う。そのためにも、資料ネットが、地域や家族の資料作成者や歴史、家族史への思いの受け皿となり、保存活用の可能性を開く支援ができればと考えている。

一方、資料ネットがこれまで整理してきた資料はメンバー構成上、県中部・中東部の資料に限られてきた。筆者が県西部で勤務していた際も、家庭や地域でこうした近現代資料と出会う機会があり、資料保存の必要性を感じていた。特に県西部には学芸員のいる歴史系の資料館が少なく、資料保存や記録のノウハウが十分に普及しているとはいえない。郷土史団体の活発な地域の特性を生かし、資料ネットや博物館、教育委員会と連携して、資料保存や記録の活動にも地域で参画していただけたらありがたい。

地域における人口減や過疎高齢化の進行は今後ますます歴史資料の散逸を加速させるだろう。その際に、地域で「それは歴史資料として貴重だから記録保存を」と呼び掛けられる在野のアーキビストが一人でも増えることが、資料の保存継承につながる。「歴史文化を伝える歴史資料は地域で守る」という地域の文化力向上のため、博物館や大学、教育委員会、郷土史家らさまざまな立場の人たちの連携が欠かせない。

## 【参考文献】

- 〔注1〕 大国正美二〇一三「在野のアーキビスト」論と地域歴史遺産」  
〔注2〕 詳しい設立経緯は、拙稿を参照（楠瀬二〇一六b）。

- 〔注3〕 定例会の場所が変更になる場合もある。

- 〔注4〕 <https://www.facebook.com/groups/404644176658001/>

- 〔注5〕 小冊子は、笠川科学研究助成（実践研究部門）「高知県における戦争資料の調査・データベース化」の助成金を活用して発行した。

- 奥村弘二〇一四「被災歴史資料と災害資料の保存から歴史研究へ」『歴史学研究』九二四  
高知戦争資料保存ネットワーク編『高知の戦争資料を残す・伝

える』

楠瀬慶太二〇一三「地域再生の歴史学」『地方史活動の再構築』

雄山閣

楠瀬慶太二〇一六a「地域から戦争を語り継ぐ」『よど』一七号

楠瀬慶太二〇一六c「地域づくりにおける歴史民俗分野の重要性」日本民俗学会第六八回年会報告

楠瀬慶太二〇一六b「高知戦争資料保存ネットワークについて」

『地方史研究』三八三

楠瀬慶太二〇一六b「高知県における歴史資料のデータベース化試論」『高知工科大学研究紀要』一五巻一号

佐藤大介二〇一四「歴史資料保全と『ふるさとの歴史』叙述」『歴史学研究』九二四

田辺末隆・楠瀬慶太二〇一六『万山十川開拓団史資料集』

四十町人権教育研究協議会

成田龍二二〇一〇『戦争経験』の戦後史 岩波書店

## 十九番福浦監視哨の記録 —証言・史料編—

多田 仁

### はじめに

昭和十二年の防空法制定に伴い、国内各地に防空監視隊および防空監視哨が置かれるようになる。これによって軍組織以外の民間人による国民防空が終戦まで続けられた。本稿で紹介する十九番福浦監視哨は、宇和島防空監視隊に所属していたもので、これまで『西海町誌』でその存在が示唆されていたが、その様相は不明な点が多くた（註一）。そこで、当時を知る方々からの証言によつて、平成二九年四月一日と翌年四月二日に現地を確認し関連する遺構と遺物を認めるに至つた。さらに、証言聴取や史料調査で当時における実態を把握できたため、本稿でその詳細を報告しておきたい。

半島の南部に形成される、標高約三七〇メートルの山頂部に残る（写真1）。北には標高四九一メートルを測る権現山が、南側には太平洋が展開している。周辺には、権現山以外にも三〇〇メートル前後の山頂が周囲に連なつており、本哨の立地する山頂は、これらでは最も標高値が高い。現在は現生植物の繁茂で周囲の見通しは不可能だが、当時は東の福浦集落、南部の太平洋沿岸および鼻面沖を一望できる条件であつたと考えられる。

なお、周辺には高茂岬防備衛所、武者泊砲台、回天麦ヶ浦基地等の遺跡が知られ、福浦集落と高茂岬防備衛所を結ぶ約二キロメートルの軍道も整備されていた（第1図）。この軍道は本哨への連絡も可能とするものであり、当時の哨員たち



写真1 十九番福浦監視哨遠景 (福浦地区より)

### 一 立地と周辺

十九番福浦監視哨は、愛媛県南宇和郡愛南町福浦に所在し、戦時中の行政区分では西外海村に相当する。関連遺構は、西海

### 会費納入と新会員募集について

発足二十年目を無事に終えられた当会です。令和元年  
度も引き続き、会員皆様のご継続をお願い申し上げます。  
納入は同封振替用紙または各市町村の理事あてにお願  
い致します。振替送金の場合は受領証をもつて領収書に  
替えさせて頂きます。

市町村の理事に依頼する場合は理事の領収書をもらつ  
て下さい。（用紙あり）

なお本会事業維持のために会員の方は六月中頃までに  
会費納入をお願い申し上げます。

また本会は設立の趣旨に基づいて新会員を募集してお  
ります。広域の情報を得たり、歴史文化に関する仲間を  
広げたりするためにもご入会をおすすめ下さい。

第20号多くの広告を掲載して頂いたことを  
感謝申し上げます。

広告は1頁・1/2頁・1/3頁で  
お願いしております。

広告についての問い合わせは  
西南四国歴史文化研究会「よど」事務局まで

〒798-3311  
愛媛県宇和島市津島町岩淵甲1453

TEL (0895)32-2897 首藤 修史 宅

E-mail syutounagahumi@md.pikara.ne.jp

印刷所	振替口座	電 話	発行所	西 南 四 国 歷 史 文 化 論 著 「よ ど」 第二十号
佐川印刷株式会社	○一六五〇一七一四〇二三	○八九五ー三二一一八九七	宇和島市津島町岩淵甲一四五三 西南四国歴史文化研究会	ホーメーベージ <a href="http://www.netwave.or.jp/~toskondo/">http://www.netwave.or.jp/~toskondo/</a>
佐川印刷株式会社	○一六五〇一七一四〇二三	赤 松 嘉 進	編集委員会	発行人
	西南四国歴史文化研究会	嘉 進	編集責任者	編集委員会